

平成26年度大東文化大学大学院 文学研究科書道学専攻特別講義

## 書学と書作の融合—古筆の復元的臨書と推定復元—

筑波大学大学院教授

森 岡 隆

### 古筆学の提唱と進展

### 古筆分割の功罪

### 古筆の年代推定、筆者推定

### 古筆の料紙と装丁

### 復元的臨書とその発表形式

断簡の接続

料紙サイズの復元

虫損や唐紙の剥落等による欠落箇所を倣書で補充

奥書、集付、合点、見せ消ちなどの扱い

高野切

寸松庵色紙

継色紙

元永本古今集 など

### 古筆の推定復元

零本や断簡で遺る古筆の使用仮名とその頻度、連綿や散らし書きの特徴、料紙や装丁などを踏まえつつ原姿に復元する試み

高野切

法輪寺切巻下

寸松庵色紙

継色紙

関戸本古今集

曼殊院本古今集

本阿弥切

十五番歌合

卷子本古今集卷十三 など

### \*拙作における試み

## 主要古筆 装丁別一覧

### 卷子本

- 桂本万葉集 (巻四零本 御物。巻四断簡は梅尾切。高野切第二種と同筆)
- 藍紙本万葉集 (藤原伊房〈1030~96〉筆。巻九零本 京都国立博物館蔵。巻十、十八断簡)
- 天治本万葉集 (巻十三完本「天治元年〈1124〉六月廿五日辰時書写了」。巻十五零本・断簡、二、十、十四断簡)
- 高野切古今集 (第二種は源兼行〈~1023~74~〉筆)
- 本阿弥切古今集 (巻十二零本、巻十六・十七零本、巻十、十一、十八各断簡、巻十四は断簡の他詳細不明)
- 曼殊院本古今集 (巻十七零本)
- 卷子本古今集 (推定藤原定実〈~1077~1119~〉筆。仮名序 大倉集古館蔵。巻十三零本 文化庁蔵、他断簡)
- 堺色紙 (本願寺本三十六人家集の重之集・清正集、卷子本和漢朗詠集、大色紙と同筆)
- 大字和漢朗詠集切 (高野切第一種と同筆)
- 雲紙本和漢朗詠集 (完本 宮内庁三の丸尚蔵館蔵。高野切第二種と同筆)
- 関戸本和漢朗詠集切 (戦後分割。関戸家蔵 上下零本2巻、他断簡。高野切第二種と同筆)
- 近衛本和漢朗詠集 (陽明文庫蔵 巻下零本2巻、他断簡4葉。唐紙。高野切第三種と同筆)
- 法輪寺切和漢朗詠集 (巻下の断簡。羅紋の飛雲紙。高野切第三種と同筆)
- 卷子本和漢朗詠集 (完本 宮内庁三の丸尚蔵館蔵。唐紙・染紙・雲紙等交用)
- 安宅切和漢朗詠集 (明治11年〈1878〉近衛家献上→宮内庁三の丸尚蔵館蔵 巻下零本、他断簡)
- 久松切和漢朗詠集 (松山藩主久松家伝来。昭和35年〈1960〉頃、巻上分割。巻下 出光美術館蔵)
- 太田切和漢朗詠集 (掛川藩主太田家伝来。静嘉堂文庫美術館蔵 巻下零本2巻、他断簡)
- 益田本和漢朗詠集切 (益田鈍翁〈1848~1938〉旧蔵 巻下1巻、東京国立博物館蔵。巻上断簡9葉)
- 多賀切和漢朗詠集 (藤原基俊〈1056~1142〉永久四年孟冬二日奥書。巻上・下断簡)
- 葦手下絵和漢朗詠集 (完本 京都国立博物館蔵。藤原伊行〈~1149~75?〉筆)
- 戊辰切和漢朗詠集 (巻上 藤原伊行筆・巻下 藤原定信〈1088~1154~〉筆。ともに異説あり。昭和3年分割)
- 秋萩帖 (東京国立博物館蔵。万葉集・古今集・後撰集等所収歌。第1紙と第2紙以下別筆)
- 大色紙 (万葉集・古今集等所収歌)
- 深窓秘抄 (藤原公任〈966~1041〉撰101首。飛雲紙16枚。藤田美術館蔵。高野切一種同系)
- 歌仙歌合 (三十人撰とも。飛雲紙9枚。和泉市久保惣記念美術館蔵。高野切第一種同系統)
- 十五番歌合 (藤原公任撰。藤原伊房筆。唐紙。前田育徳会蔵 8首零本、他断簡6首余)
- 松籟切 (十番歌合とも。藤原顕季〈1055~1123〉家主催。三井高弘〈1849~1919〉旧蔵)
- 和歌体十種 (十体各5首。飛雲紙7枚の零本・断簡 東京国立博物館蔵。高野切一種同系)
- 蓬萊切 (旧称 五首一紙。賀の歌を雲紙2枚に女手3首、草仮名2首。昭和9年〈1934〉掛軸分割)
- 源氏物語絵巻 (徳川美術館・五島美術館蔵ほか。5人の寄合書き。第4類書風=藤原教長〈1109~80〉)

## 冊子本

### 粘葉装

元暦校本万葉集（14巻分零本、うち巻二十奥書「元暦元年〈1184〉六月九日以或人校合了」。巻十一断簡）  
金沢本万葉集（藤原定信筆。巻二・四零本 宮内庁三の丸尚蔵館蔵。巻三・六零本 前田育徳会蔵）

寸松庵色紙（12枚 大徳寺の塔頭・寸松庵に伝来の由。古今集四季の歌。唐紙 内面書写）  
筋切・通切古今集（歌合用料紙を切断・横転。推定藤原定実筆）

粘葉本和漢朗詠集（完本 宮内庁三の丸尚蔵館。高野切第三種と同筆）

伊予切和漢朗詠集（後、綴葉装に改装。伊予国西条松平家伝来、大正13年分割。高野切第三種と同筆・同系）

継色紙（旧称 半首切。万葉集・古今集・未詳歌集所収歌。染紙 内面書写）

香紙切麗花集（丁子染め楮紙所用。『麗花集』写本は他に「八幡切」のみ）

本願寺本三十六人家集（天永3年〈1112〉白河法皇六十賀説。定実・定信・藤原道子等20人寄合書き説）

小島切斎宮女御集（小島宗真〈1580～1655～〉旧蔵か。飛雲紙。前田育徳会蔵零本ほか）

### 綴葉装（列帖装）

関戸本古今集（戦後、関戸家蔵48枚（96頁）零本分割→27枚（54頁）。含断簡11巻分+近衛家熙臨模の巻四）

元永本古今集（東京国立博物館蔵 完本の上冊奥書「元永三年〈1120〉七月廿四日」。推定藤原定実筆）

升色紙（清原深養父〈清少納言曾祖父、生没未詳〉家集。藤原定家〈1162～1241〉集付、合点）

針切重之の子の僧の集（端書「こなたはしげゆきがこのそうのしふなり 仁与」。楮紙）

針切相模集（詞書なし。楮紙）

和泉式部統集切（筆者2人説、3人説）

徳川本重之集（源重之家集の巻末百首+「かずよりほかにたてまつる二首」。雲紙交用）

### 大和綴

一条撰政集（藤原伊尹〈行成祖父、924～72〉家集。重ね方は綴葉装。藤原定家の外題、集付、校訂）

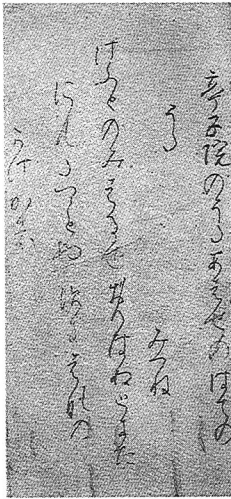
伝西行筆 中務集（重ね方は綴葉装。出光美術館蔵。藤原定家の元外題合点、校訂）



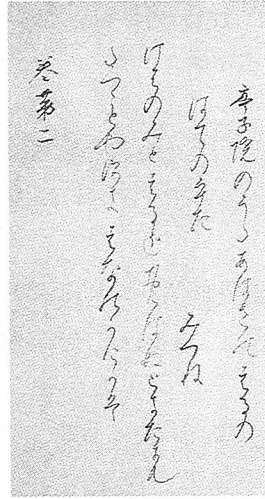
### 古筆復元、原本再構築の試み

森岡 隆

明治四十四年創刊の『書苑』あたりに始まる科学的な考究を受け、「古筆学」を提唱したのは飯島春敬（一九〇六―一九六六）で、昭和一四年の著『古筆名葉集』別冊解説の序文でその必要を説き、本論でその方法論を実践したのであった。藤原伊房・定実父子の書の確定・推定や、高野切第一種の藤原行経筆者説なども、この著に始まったもの。現今では小松茂美先生の『古筆学大成』など、古筆の網羅把握・研究が進んでいる。しかし、それらの大半は長い伝来の途次、零本や断簡となつてしまつたもの。そこで私の教室では、使用仮名とその頻度、連続や散らし書き



高野切巻二巻末断簡 (徳川美術館編『彩られた紙料紙装飾』所載)



中谷正氏 高野切巻二復元(部分)

の特徴、料紙や装丁などを踏まえ、臨書で培った技法を駆使しつつ、欠失部分を做書で補う「復元」を奨励している。伝本系統の理解も必要ではあるが、写本ごとに歌序や語句の異同が指摘されるのであつてみれば、流布本の刊本を底本とせざるを得ない。ただ、主要古筆での表記が注記されたものや、古筆研究者校訂のものを採用することを勧めている。

ともあれ、本阿弥切巻十一・十二・十六、関戸本古今集巻四・二十、法輪寺切巻下、針切重之の子の僧の集、伝西行筆小色紙、名家家集切本堤中納言集、寸松庵色紙の見開き復元、などの復元がなされてきている。高野切でも巻一・二・九・十八・十九に加え、伝存皆無の巻十・十四の復元も完成し、完本の巻五・八・二十と合わせて十巻揃つたことになる。

が、こうした復元後に原本が出現することもある。たとえば、中谷正氏が平成一一年春、高野切巻二の復元巻を修了制作として提出した直後の一三年秋、その巻末断簡が出現。第二種では巻三・五・八の巻末歌がいずれも三行で、巻二もその蓋然性が高いことを推知しつつ、五三〇センチの長巻の第一〇紙が数センチ足りず、やむなく二行にまとめたのだが、案の定、新出断簡は三行。また、原本には詞書の「はるの」がなく、歌の初句も「けふとのみ」という異同。とはいえ、右記「はるの」を除く詞書と歌、計四九字中三六字が原本と同字。つまり四分の三が原本どおりなのである。第二種の字母数が少ないとはいえ、これは非常に高率。というのは、第二種筆者の源兼行自身、うっかり一巻中に同一歌を二度書いたところが二箇所あり、その二組とも用語・用字など、完全には一致しないからである。すなわち巻五・二七〇と二九八。江戸時代前半に巻五の第四紙と第八・九紙にまたがる両紙から切り取られた重複歌が、各々手鑑「世々の友」と「毫戦」に押されている。なお、これについては橋本貴朗君が検証してくれ、札幌大会で発表することになっている。原色図版なき時代、田中親美（一八七五―一九七五）複製の恩恵を蒙つたように、古筆の復元が原本再構築に寄与することもあろうかと思う。